SIDE:A　表と裏と奥

針とら

1

自分の仕事は、覗きと何も変わらない。検索窓に見知らぬ相手の氏名を打ち込みながら、早紀はときどきそう思うことがある。

「それでは二本橋さん。学生時代、力を注いでいたことを教えてください」

隣に座っている前園が言って、顎の下で手を組んだ。

長机が一つにスツールが四つあるだけの、簡素な面接室だ。スツールは三つが壁際の長机に沿って並び、受験者用のものだけが少し離した部屋の中央に、見世物のように配置されている。

腰掛けた学生の背は、木の棒のように伸びていた。両手は膝の上に乗せられて、軽く握られている。

「はい。私は一年から三年までの間、大学のボランティアサークルに入っており、老人ホームを対象としたボランティア活動に力を注いできました」

「それは素晴らしいですね」

前園がにこにこと相槌を打つ。

「その活動の中で、感じたことや、得たこと、成長したことなどがあれば教えてください」

「記憶に残っているのは、去年の三月に区内の老人ホームを訪問したときのことです。ただ会話相手になるだけで、おばあさんがびっくりするくらい喜んでくれました。その笑顔がずっと印象に残っていて、いろいろな老人ホームを回るうちに、人のために何かをしたい、社会貢献をしたいという気持ちが強くなりました。人として成長できたのではないかと思っています」

「そうですか。それは素敵ですね」

ここ数日、似たり寄ったりな体験談を毎日聞き続けている。それでも前園は、毎回まるでとても興味を持っているかのような素振りで話を聞く。相手の口を滑らかにして話を引き出す技術はさすがだと早紀は思っている。前園がもう二回りほど若くて痩せていてイケメンだったなら、中小企業の人事部長ではなく、ホストをやっていただろう。

開発部長の寺田は、机の上に置かれた履歴書に視線を落としたまま、顔を上げない。学歴欄と資格欄を流し見し、技術用語を踏まえた質疑を二つぶつけたあとは、まるきり興味を失った様子だった。

「志望動機を教えてください」

「御社は七星グループのグループ会社として、システムサービスを通して広く社会に貢献しておられ、技術力もトップレベルであると認識しています。私は人のために何かをしたいという願望が強く、人の役に立つシステムを作り続ける御社の下でならばそれが叶うと考え、志望致しました」

面接シートには、新入社員面接におけるチェック項目が並んでいる。チェック項目は多岐に渡っており、第一印象、志望動機、服装、態度、話し方、積極性、協調性、専門性、などの項目が五段階評価で並んでいるほか、『学生時代に得たもの』、『(同業他社ではなく)弊社を志望した理由』などの自由記述欄が配されている。

寺田がペンを走らせているので、何か特筆すべきところがあったのかと盗み見ると、『うちの社のどこが社会貢献してるんだ?』と落書きをしていた。

早紀は顔を上げて学生の話に相槌を打ちながら、ノートパソコンに置いた指を、そっと走らせた。

メモをとるためではない。ネットに繋ぐためだ。面接前の休憩時間に、既にそれらしいサイトは見つけてあった。

履歴書欄に書かれた学生の名前は、二本橋卓也。『二本橋　卓也』を検索エンジンに打ち込むと、五十七件のヒットがある。類似記事や検索ノイズを除去してまとめると、『二本橋卓也』に関係するサイトは、四つに絞られる。

一つ目は『二本橋卓也のたくたくブログ』。盆栽が趣味の沖縄在住のおじさんです、と短いプロフィール文がある。記事の文体、言葉の選びも、若者のものではない。次に電子掲示板。この投稿も、沖縄在住の二本橋卓也のものだ。

三つ目と四つ目のサイトが有力だった。一つは大学合同ボランティアサークルのウェブサイト。メンバー欄に『二本橋卓也』の文字があり、大学名が履歴書と一致している。もう一つは『徒然なる日記』というタイトルのブログだ。プロフィール欄に『二本橋卓也』とあり、記事カテゴリに『就活』という単語が含まれている。

早紀はブログの上でショートカットキーを叩き、ページ内検索窓を開いた。机に広げた履歴書を確認し、二本橋卓也の出身大学である『立零大学』と打ち込む。ヒットした。ブログ全記事の中で七件合致し、『うちの大学』『母校』といった語と共起している。

年齢は二十二。出身は千葉県四街道市。出身高校は私立坂上高校。一浪。『四街道』『坂上』『浪人』。次々に打ち込み、履歴書とブログの繋がりをチェックする。

記事の一つに、プリクラの画像が貼られているのをみつけた。髪を逆立てた金髪の男が、金髪の女と腕を組んで、中指を立てて舌を突き出している。
早紀はモニタから顔を上げ、背筋を伸ばして座っている学生の顔を窺った。
間違いない。黒髪で、鼻にピアスもないが、同一人物だ。
「差し支えなければ弊社の志望度をお聞かせ頂けますか」前園が言った。
「第一志望です。他の会社は考えておりません。是非とも御社に入社し、皆様と一緒に働きたいと思っております」
早紀はブログの最新記事を呼び出した。昨日の日付だった。

【明日は七星システムズの一時面接。子会社とかやる気起きねー。適当にエントリーシート書いたし、志望度〇だからなんも調べてない。すっぽかしたいけど仕方なく行ってくる。圧迫面接とかされたらキレるかもw】

日記を遡った。最近の記事は、ほとんどが落ちた会社の悪口か女の話題だ。去年十月の記事では、合同説明会に参加していた各企業の女人事の胸の大きさ推定結果と、誰を犯したいかリスト。同月二十日には説明会に遅刻しそうになって駐輪場から他人の自転車を盗んだことを自慢げに記述。
『ボランティア　老人ホーム』でページ内検索をかけた。ヒットした。

【今日はサークルの活動で老人ホームへ。就活で有利になるって聞いて入ったサークルだが、初めて顔出した。老人ホームは最悪。ジジババくさすぎ話長すぎ。うざいからババアの服にお茶ぶっかけて話切ってやった。そしてかけたの俺なのに謝るババア（笑）
とっととくたばって若者の負担を軽くしろ老害ども】

過去は嘘をつけない。ネットを漂う記憶は消えない。表で繕うのが上手くても、ネットで無防備な人間は意外なほど多い。細いケーブルの向こうにいる百億の人間をリアルに感じることは困難だ。
表の面接だけでは弾けない人間性を濾過するのが早紀の仕事だった。
早紀は面接シートの自由記述欄にサイトのアドレスを引き写し、下に大きな×を書いた。ブログの記事をいくつかピックアップして保存する。カチリと音を立ててノートパソコンを閉じた。

前園が時計を確認し、締めにかかった。
「それでは本日の面接はこれで終了です。結果は一週間以内にメールで通知します」
「ありがとうございました！　是非ともよろしくお願い致します！」
二本橋卓也は朗らかな声でそう言うと、ドアの前で「失礼します！」と元気いっぱいなお辞儀を一つし、面接室を出ていった。

2

「ねえタカちゃん。虚しいよ」
「またですかサキさん」
乾杯を終え、ジョッキをぐっと呷ってから早紀が言うと、高橋雄大は海老のしっぽを口にくわえたままくつくつと笑った。お通しをさっさと空にして、唐揚げや焼きそばを次々と頼む。丸い体をさらに丸くしようと頑張っている。
雄大とは同期入社のよしみで、たまに居酒屋で安酒を一緒に飲む程度の仲だ。温和な気質で物腰が柔らかい雄大は、何を愚痴ってもくつくつと笑って受け止めてくれる。いつの間にか、人事部内で零しにくい類の愚痴は雄大に零す、という習慣ができてしまっている。
二本橋卓也のことを話して聞かせると、雄大は鞄からノートパソコンを取り出し、件のページを検索した。記事を読みながら、これは凄いなあ、と笑っている。
「こういうの、どうやってみつけるんですか」
「基本は、公共度の高いページを入り口に、徐々に私的なページを辿っていく感じだね。まずは本名で検索(クロール)。ＳＮＳならそれだけで結構個人ページが引っ掛かる。みつからない場合は、サークルとか研究室、学会なんかのページには本名が記述してあることが多いから、まずそこを引っ掛ける。サークルや研究室のサイトには、個人サイトへのリンクが貼られてることが多い。そうでなくても友人とか研究とか趣味とか、いろんな情報を収集できる。そしたら、それらをキーワードに加えて再検索(リクロール)。徐々に辿ってく。コツがいるけど、慣れると早いよ」
「へえ。なんだか格好いいな。ネットプロファイル。ほんとの探偵みたいだ」
「ネット伝って覗き見するだけじゃん」
「そう言っちゃ身も蓋もないけどさ。ＷＥＢ系の開発者としては興味がそそられますね。どれくらいの割合で相手の情報が引き出せるものなの？」
「履歴書の情報量にもよる。ユニークな経歴を持ってる人は見つけやすい。ブログや個人ページ

まで特定できるのは少なくて、全体の二割弱かな。サイト自体持ってない人も多いし、見つけだせないのももちろんある。掲示板の書き込み程度の情報も含めると、五割くらい」
「確実性には遠いけど、無視できない情報量っすね。そういう意味では、ネット利用の情報分析としてはスタンダードかもしれない。情報の質としては玉石混合だけど、収集コストと量を考えれば拾っておいて損はないってのが、企業のネット活用の主流だから」
「やらされる身としては大変だよ。毎日毎日、人の裏を漁るようなことばかりしてると、軽く人間不信になる。熱い想いの言葉を聞きながら、垂れ流しの愚痴を読むわけ」
「知らぬが仏。男女関係と同じですね。恋愛期と倦怠期を同時に経験しているようなもんじゃないですか」
「そんな経験したくない」
「早紀さんは思いつめるからなあ。新卒面接なんて、あることないこと言ってなんぼじゃないですか。この二本橋某みたいに極端な例はともかくとしてさ。可愛い奴めって適当に流しておけばいいんですよ」
開発区の雄大は、新卒面接に関してあっけらかんとしたものだ。
彼らは人事の仕事を意に介しない。もちろん彼らにとっても、新しく配属されてくる新人は気になる存在のはずだが、その選抜については当たるも八卦当たらぬも八卦程度に考えている。その考えの軽さに、早紀は自分の仕事を軽視されているような不満も、気分が軽くなるような安心も感じる。酒の席では後者が強い。同じ人事部の人間相手では、こうもいかない。
人事部長の前園は、面接でのやりとりを通して学生の人間性がわかると信じている。そんな自信を持っていられるのは、前園の役職が高く、入社直後の爽やかな仮面を決して外さない新入社員としか接しないせいだと早紀は思う。教育を終えて部署に送った後のことなど知らないし、プライベートでどうしているかなど思いもしない。
前園は、早紀の調査詳細にも目を通そうとしない。彼が好評価を下した学生に、早紀が待ったをかけると嫌な顔をする。親会社の指示なのでしぶしぶ制度に従ってはいるものの、機械嫌いの前園にとって、ネットの情報を選考材料として使うなど、到底受け入れがたい発想であるらしい。
早紀の考えは違っていた。たかだか三十分の面接で、相手の本当の人間性など、わかるわけがないと思っている。
「はじめはね。もっと目をキラキラさせた学生を相手にするんだと思ってたのね」
いささか呂律が怪しくなりはじめた早紀の言葉に、雄大は律儀に相槌を返してくれる。
「前に聞きましたよ。学生が将来への夢とか希望とかを語るのを聞いて、一緒に頑張りましょう！

って分かち合いたかったんですよね。青春ドラマみたいに」
「そうなの。青春なの」
「でも現実は違ったと」
もちろん違った。目を輝かせてやってくる学生などいなかった。学生たちは面接室に入るときに、輝いたシールをぺたりと貼って、退出したら丸めてゴミ箱に捨てる。瞳の奥で彼らは、目を輝かせて何になる？　と言っている。
（自分の言葉で話してほしいのです）
昔、新卒で受けた面接で、早紀はある面接官にそう言われた。
受ける会社受ける会社に落ちて焦り、面接教本を熟読して、忠実になぞるように話をしていたら、にっこり笑って言われたのだ。
（あなたを雇うかどうか決めたいのです。本の著者を雇うかどうか決めたいのではありませんよ）
それで何かが吹っ切れた。やけくそ気味に語り始めた内容は支離滅裂だったが、口から言葉が零れるのと一緒に、ずっと眠って凝り固まっていた気持ちが、起き出して胸に馴染んでいく気がした。結局最終で落ちてしまったが、あのときの面接官の言葉がなければ、早紀は就職活動を最後まで続けることができなかったかもしれない。

だからこそ早紀は、面接をするときに、なんとか相手の想いを引き出してやりたいと思う。それでも木霊のようなやりとりを繰り返すうちに、胸の内で情熱が薄れていって、いつの間にか学生を「あなたに来て欲しい」と選ぶのではなく、「ハズレの少なそうな集団を作ったらたまたまあなたが入っていた」と選んでいる。
それに気付いたとき、早紀は仕事にやりがいを感じることができなくなっていた。
「そのうちいいことあるって。型に嵌まらない学生が来て、乾ききったサキさんの心に情熱を注ぎ込んでくれるとか」
そして一ヶ月後の、四月初旬。確かに、型に嵌まらない学生は来たのだった。
書類仕事を終え、翌日の面接担当分の学生をサーチしていた。
ある学生を検索してみつけたブログの投稿に、早紀はマウスを握っていた手を止めた。
【東京都大田区の株式会社××テ×ト人事の〇岡彰を殺害する。】

「ほんとにこいつのブログなの？」
雄大が履歴書の写真に目を落としたまま言った。
「うん。今日の記事に、明日面接予定の会社の話題が出てるんだけど、うちのことだよ」
履歴書に記された名前は、久遠坂和之。東征大学材料科学科の四回生だ。スーツを着てネクタイを締めた線の細い顔が、履歴書の写真の中からこちらを見返している。
『就活日記』というタイトルのブログだった。プロフィール欄の名前は『クオンザカ』。大学名や学科名も記述されており、履歴書と一致する。まだ新しいブログで、内容は就職活動における備忘録かつ愚痴日記といったものだった。
並んだ記事の一つ、一昨日の記事が問題だった。

【東京都大田区の株式会社××テ×ト人事の〇岡彰を殺害する。罪名はくだらない面接と偏見で不当に他人を評価した罪。ナイフで刺殺する。】

最新の記事には、明日受ける会社として、七星システムズの名前があった。
早紀は明日の受験者全員の履歴書のコピーを持っている。久遠坂和之の履歴は、ブログのプロフィールに記されたものとぴったり一致した。
「誰かに相談した？」
「前園部長に話してはみたんだけどね。流し見して、眉しかめて、これだからネットは、って」
「それだけ？」
「あまりこういうの、見たくないみたい」
「そういう問題かなあ。一応、殺人予告だよ、これ」
ある程度以上の世代には、前園のような反応が多い。日常の中で蓄積された愚痴が吐き出される場所に、特別扱いを与えている酒好きの世代だ。
雄大は世代が違う。うーんと首を捻った。
「この頃では、ネットの書き込みに警察も目を光らせるようになってきてるんだけどね。実際、逮捕者も多く出てる」
「通報した方がいいのかな。親会社の指示を仰がないといけないけど」
「どうなりそう？」
「十中八九、通報するなって言われる」
七星本社人事部は、ネットプロファイル制度を公にしたくない。七星グループは、人に優しい

企業グループ、をイメージ戦略の中心に据えている。リクルートについても、人間性を重視した選考を前面に打ち出すことにより、新卒の若者の心を捉えているのだ。そのイメージを損なうようなことは、本社からチェックが入る。

ネットでこそこそ嗅ぎ回っている――そんなイメージを避けたい本社は、通報して事を大きくしたがらない。ネットに目をつけている企業だからこそ、風評被害の危険性を軽視しない。子会社からあがった報告は、綺麗なカーブを描いて、毒気を抜かれた一番当たり障りのない返答として返ってくる。

「通報せず、該当学生は落とせ。それで終わりか」

雄大が唸った。

「まあ、それが一番無難な対応なんだろうな。ネットでの殺人予告なんて、実際のところ悪ふざけがほどんどだし」

「でも、この予告されている人はどうなるの」

早紀は納得がいかない。言うなれば、自分は第一発見者なのだ。自分が通報をしなかったことによって、万が一この予告相手が実際に殺されてしまったら、やりきれない。

雄大の言うように、ネットでの殺人予告は、大抵の場合、単なる悪ノリの極端な発露にすぎない。警察が動くのは、酒の席の悪ノリと違って、書き込みがデータとして残るからだろう。万一実際に問題となった際に、突き上げが具体的になり加速しがちだからだ。

早紀が怖いのも、その万一の可能性だった。問題は久遠坂が本気なのか否か、その一点だ。ただの悪ノリの類なのか、本当に殺意があるのか。後者ならば、本社がなんと言おうと、通報を行う義務があるはずだ。

ブログの簡素な書き込みからでは、その判断をつけることができない。

「本人に確認でもできればいいんだけどね」雄大が苦笑した。「メールアドレスもコメント欄もないし、まともな返答が得られるわけないだろうけど――」

「いや、それっていいアイデアかも」

早紀が指をさすと、雄大は目を瞬いた。

ブログの記述から真意は見えない。無味乾燥な情報から人間性を推し量ることなどできない。それを見通すのが、早紀の本来の仕事だったはずだ。

「確認してみればいいんだよ。面接で」

履歴書の写真に貼られた久遠坂和之が、早紀をじいっと見上げていた。

「皆さんは、あるシステム系の会社を運営しています。同僚のMさんが、会社の悪口をネットで言いふらしているのがわかりました。Mさんにどう接すれば良いかグループで討議し、結果をまとめて発表してください。討議時間は三十分、発表時間は七分です」

テーブルを囲んで着席した学生たちの人数は、女二、男三の計五人だ。

悩んだ末に決めたグループワークの課題を発表しながら、早紀は間近に見る久遠坂和之を観察した。これという特徴のない、埋没しがちなタイプの学生だ。緊張している様子が窺えた。

「それでは、ディスカッションを開始してください」

開始を告げ、脇の面接官席に引っ込んだ。前園と寺田と並んで座り、学生たちがどう討議を進めるかを審査する。机の上には七星グループ標準のグループワーク評価シートが載っている。ペンの芯を出しながら、ストップウォッチを押した。

学生たちはそこそこ手馴れており、誰が係をやるか手早く決めた。

「リーダーになりましたので、私、林が進行をしたいと思います。Mさんが会社の悪口をネットで言いふらしているということですが、Mさんにどう接していけばいいか、皆さん、意見はありますか」

学生の一人ははきはきとした口調でそう言うと、一同を見回した。全員が様子を窺うように、誰からいこうか、と互いの顔を覗き込んだ。

グループ面接は匙加減が難しい。印象が薄くなってはアピール力不足と判断されるが、出すぎて他人を萎縮させても協調性不足とみなされる。学生たちは様子を窺い、自分の出方が最適かを常に計算する。

計算の間の微かな沈黙に、耐えきれなくなるのはリーダーが多い。

「えっと、みなさん意見はないんですか？　中村さん、どうでしょう？」

林は脇の女の子に振った。やや性急だ。一瞬の沈黙を議論の停滞と捉えた反応は、責任感は強いが余裕が足りないタイプに多い。

早紀は手元で、シートの性格特性ダイアグラムに下書きで薄く点を振った。積極性を目盛りプラス一、落ち着きを目盛りマイナス一。書き込むときに動かすのは視線だけで、顔は動かさない。シートには『注意点:学生の議論への集中を乱さないよう、面接官は態度に気を配ってください』と太字で書いてある。

「そうですね」振られた中村が答える。「私なら、Mさんが会社のどこに不満なのかを聞きだし

て、悩みを聞いてあげます。会社の中に、愚痴を零せる友達がいないことが問題なのではないかと思います。現実で友達がいないから、ネットに逃げ込むんじゃないかな」
「それは凄くそうだと思います。喋れる人がいないから、外で出しちゃうのってあると思う」
「友達になってあげるっていうのは、解決策の一つだと思う」
うんうん、と皆が頷きあう。心の中では頷いていないが、同意から入り雰囲気を和らげるのが序盤の流れだ。
ちなみに本当に同意しているかどうか、その同意度は相槌と首の傾け具合から判断できる。男の場合は判別容易。女の場合は、同意度と頷きの間に、ほとんど相関のない子もいるが。
「他の人はどうですか」
林が別意見を募る。ここからが本番だ。全員の同意は議論の収束を意味する。終盤では好ましいが、開始三分で収束しては面白くない。好むと好まざるとに関わらず、序盤では、誰かが反乱分子役を引き受けることになる。
グループディスカッションは一幕の寸劇だ。面接官という観客の前で、彼らは見栄えの良い舞台を披露したいと願っている。
だが面接官が見たいのは、客を意識した演技ではない彼らの日常の姿だ。定年まで演技し続けることなどできないのだから。だから議論という火種を放り込む。演技としての舞台を行っているうちに、彼らは段々と自分自身を出しはじめるのだ。
「誰か意見ある？」
「確かに話を聞くのはいいと思うんだけど」口火を切ったのは久遠坂和之だった。「友達がいなくてネットに逃げてるから悪口を言うっていうのは、ちょっと違うかとも思うな。ネットくらいみんなやるんじゃない？」
「うんうん。ネットやる人多いよね」と関口。
「僕も久遠坂さんに同意です」と天峰章吾。「単純に、Mさんは、ネットが公の場でみんなが見ているってことを、認識してないんじゃないかな」
「それもあるよね」
「ネットって公の場？」
「皆が見られるなら公の場じゃない？」「公の場だったら、取り締まれないのかな」「殺害予告とかなら逮捕事例はあるけど、名誉毀損程度だと難しいかもね」「殺害予告なんてあるんだ」「結構逮捕者も出てるよ」「聞いたことあるな」
「ちょっと話が反れてるけど」

中村が打ち切る。
「まとめると、どういうことなのかな。天峰さんたちの言うように、Mさんがネットを公の場と意識できてないとして、どうすれば意識してもらえそうなの？」
「それはまだわからないけど……」「どうだろうな」「地道に注意するしかないかな」
「注意して聞くような相手だったら、初めからこんなことしないような気がするんだけど」
「それは確かに」
「どころか、気を悪くしてもっと酷いことを書かれちゃうような気がするんだ。やっぱりまず悩みを聞いてあげないと、そこらへん、素直に納得できないんじゃないかな。どう思う？」
関口が大きく頷いた。「わかる」
この子はややオウム返しが多い。ペンが走る。協＋、自主－。
「私としては、社会人として大事なのは、まずコミュニケーションじゃないかと思うんだよね」
「うんうん」
「だから、やっぱりまず話を聞いてあげるのが大事なんじゃないかと」
「そうだなあ」「確かに」
“友達になる派”中村が主導権を握る。メンバーが首肯しつつも納得していないのに気付きやや不満げ。そろそろ彼らの意識は観客の視線から離れ、目の前で展開するイベントに捕らえられはじめている。
首を傾げていた林が、うーんと唸りを漏らした。
「でも本当にそれでいいのかな。みんなに考えてほしいんだけど、もう大人なんだし、友達友達ってのはちょっと違うんじゃない？」
中村の表情が一瞬固まった。関口がそれを素早く察知したのは、そうだね、と言う相槌の傾角が浅くなったことでわかる。
「学校と違って、会社の話なんだから、友達友達、っていうんじゃないでしょ」
中村が下から目線で、「……いや、大人だからこそ友達が大事なんじゃ？」「うん、それもわかるし」
「天峰さんはどう思いますか？」
「確かに、ちょっと学生気分だったかもしれない」
「自分も、社会人としてコミュニケーションが大事なのは同意です。でも社会人である以上、心構えをすべきなんじゃないかな。ゆとり教育とかもそうだけど、甘やかしてばかりってのは逆に良くないでしょ。私たちは、大人として、毅然と注意することも必要なんじゃないかと」

「それは逆効果だと思う」
「なんで？」
「それだとMさんが傷ついて仕事をしなくなるかもしれない」
「注意されて仕事をしなくなる人間を甘やかすのが正しいことか、よく考えて」
「でも相手のモチベーションを保つのは重要なことじゃない？」
「子供相手にはそうだけど、大人だよ？」
「大人相手であっても上手い叱り方と下手な叱り方があるでしょう」
「叱り方によってヘソを曲げるような相手なら、余計にびしっと言ってやらなくちゃいけないと思う」「それは逆効果だと思う」
「両方わかるけど」黙っていた天峰章吾が口を挟み、漁夫の利をとった。「自分が注意されたときに受け入れられるような心構えをすべきだし、他人のモチベーションを保つような注意の仕方をする心構えもすべき、ってことかな」
その後の議論は、林と中村の意見の相違を軸に、多少の押し引きをする形で決着した。
林がまとめた。「まとめとしては、相手に率直に注意する。でも相手の機嫌をあまり損ねないよう、話も聞いてあげる、ってことだね」

中村が続いた。「そうですね。不満を聞いてあげることがやっぱり一番重要。でも相手に知らせてあげることも必要だとわかりました」
学生たちが出て行った後、寺田がぽつりと呟いた。
「……どうでも良くないか？」

【口頭選評・議事録】

■林忠志
リーダーとして、活発な議論をすることが重要だという考えのもとに発言しているように見受けられた。（早紀→B＋）
議論を盛り上げようとするのはいいが、それに頭がいきすぎて持論に固執し、他のメンバーを萎縮させていた。（前園→C）
意見がわかりやすくて良い。（寺田→A）

■中村理恵

協調性を重視した意見が好印象。人のモチベーションを気にすることができる人材は伸びる。（前園→A）

意見としては協調性が重要だと発言しているのだが、異なる意見を排斥する傾向が気になる。（早紀→B－）

他人に寛容な意見が、自分が優しくしてもらいたいという甘えからきていないといいのだが。（寺田→C）

■関口麻美

潤滑油役は買うが、周りを気にしすぎる。（早紀→B）

目立たないが空気を和やかにしようと努める縁の下の力持ちタイプ。（前園→B＋）

実のあることを言っていない。（寺田→C）

■天峰章吾

うまく場をまとめた。（早紀→A　前園→B＋　寺田→A）

■久遠坂和之

口数は少ないが言っていることは的確。（早紀→A）

思慮している感はあるが口数が少なくて伝わらない。グループワークが不慣れだと感じる。（前園→B－）

減点は少ないがよくわからない。（寺田→B－）

通常面接でもう少し話を聞いてみたい。（早紀）

異存はなし。（前園）

5

「どうでした？　久遠坂の実物は」

その日の業務を終えた夜、社食で落ち合うと、雄大は席に着く前からそう切り出した。面接の様子が気になってたまらなかったらしい。

「さもありなん、って感じの奴でした？」

「いや、ぱっと見、普通の真面目そうな学生だったんだけどね」
早紀はグループワークの様子を語って聞かせた。語り終える間に、雄大は大盛りカレーをすっかり口に運び終えてしまった。
「学生よりも、面接する側の方が足並み揃えるべきだね、これは」選評議事録を見やりながら、雄大が苦笑する。「天峰って子以外は、評価バラバラだ」
人物特性については大抵意見が一致するのだが、その評価はバラバラになることが多い。受かるべくして受かる学生は一握りに過ぎず、大半は評議での各面接官の発言力や場の流れで決まる。
「久遠坂はどんな様子でした？」
「よくわからなかった。口数が少なくて」
「このテーマですからね。自分の書いてるブログを省みたら、何も言えなかったんじゃないですか。でも思うことはあったはずですよ」
グループワークのテーマは、早紀と雄大で考えたものだった。ネットでモラルに反したことをする架空の人物。それに関して議論をするとなれば、殺人予告ブログを書いた当人としては、自分を省みざるを得ないはず――そう踏んだのだ。
「それだけ問題のあることをしているって、本人が自覚してくれればいいんだけどね。さて、反応はどうだろう」
雄大がノートＰＣを操作した。討議を通して和之の中で思うところがあれば、ブログにも出るんじゃないか――それが二人の読みだった。殺人予告が単なる悪ノリで書かれたものなのであれば、今頃慌てて消されているだろう。
と、雄大のノートＰＣの天板に、部署の管理シールが貼られていることに気付いた。会社のＰＣは、インターネットに社内ネットワーク経由で接続する設定が標準だ。会社の名札を胸に留めたまま歩いているようなものであり、アクセス解析付きのサイトに接続すれば、相手に会社名が筒抜けになってしまう。
雄大はすぐに早紀の危惧に気付き、接続ネットワークを匿名化(スクランブル)した。和之のブログにアクセス解析は付けられていないはずだが、プロファイルの際は用心に越したことはない。
「どう？　更新されてる？」
「……」
雄大は返事をしなかった。
しばらく画面を見やっていたが、やがてＰＣをテーブルの上でくるりと反転させると、早紀の方に押しやった。

【今日受けた会社のグループワークは最悪。くだらないテーマ語らせんなよ。こっちはいい子ちゃんするしかねえんだから。会社の悪口をネットで語ることの何が問題デスカ？　リアルで語ると協調（笑）乱すから、わざわざネットの方で愚痴ってやってるんだろうが。グループメンバーも低脳揃いで辟易。
そういや陸〇商〇の人事の豊橋〇史はふざけてるので殺すことにする。何あの尊大な態度。無能なくせに偉そうな団塊は死ね。】

6

「それでは、まずお名前をお聞かせください」
「久遠坂和之です」
並んだ椅子の一つに着席し、和之はやや硬い声でそう答えた。傍目には、緊張しているように見える。
いや、そう振舞っているだけだ。内心ではこの面接を馬鹿にしきっている。

三次面接で和之を落とすことはもう決めていた。三次までは人事部が主幹ですべてを取り仕切るが、最終になると役員が入ってくるため、合否決定の自由が効かなくなる恐れがある。万一でも和之を入社させるわけにはいかない。
早紀の仕事はプライベートを覗く。面接とプライベートの顔が違うのは当然だし、だからプライベートの言動をして面接の合否を決めるのは筋違いだという人もいる。だがいくら面接外とはいえ、あれほど他者を省みない発言をする人間を、積極的に雇おうという気になるだろうか。答えはノーだ。
落とすのは決まっている。問題はやはり、通報するか否かだ。
（会社名を聞き出せないものかな。こういう奴は、一度ちゃんと警察に叱責でもされないと変わらないよ）
（会社名？）
（本社の意向があるから、僕らが通報はしにくい。でも殺害予告された何処かの会社の当人が、自分で発見したということで、通報する分には問題がない）
殺害を予告されている当人たちに、その事実を伝えることはできないか。
（実際に通報するか否かは、当人たちが判断するだろうけどね。予告されている事実を伝えるこ

とまでは、必要だと思う。万が一、久遠坂がその人たちに本当に何か危害を加えたら、寝覚めが悪いよ)

予告記事に書かれた伏字付きの会社名からは、当人達を探れなかった。和之本人から、会社名を直接聞き出す必要がある。

早紀は面接を行いながら、タイミングを窺っていた。

「みんなで協調して何かを成し遂げた話、はありませんか」

面接官の一人が、和之の話をやんわりと遮った。

学生時代に打ち込んだことはという質問について、和之は、作曲活動について語っているところだった。ブログには就活の記述ばかりでそんな趣味があるとは知らなかったが、それまでの応答に比べ、喋りに熱がこもるのがわかった。和之の人間性を知らなければ、あるいは話に聞き入ったかもしれない。だが和之の本質を知っている早紀には、底の薄い話にしか聞こえない。

遮った面接官が同じ思考をしたわけではないだろう。彼の思惑はまた別だ。人事部の面接官は、面接シートの各項目の所見を埋めなければならない。グループ会社内で選考基準に不公平が出ないよう、統一された評価基準が記載された選考シート。その各項目に応じて、論理的な理屈付けをした上で合否判定を出し、提出しなければならない。

受験生数は多く、一人分のシートを埋めるのに時間は割けない。そしてシートには『協調性が期待される点』と評価項目がある。書かれるべきは多人数で何かを行った話であり、一人で趣味に打ち込んだ話ではない。面接官は、評価項目に書かれていない事項に興味が湧かない。彼らは、〜〜なので協調性が期待できる、というフレーズに合った話を引き出そうとする。

これが現場の技術系の面接官となるとまた別で、学生生活に関する話などは聞き飛ばし、技術話を引き出そうとする。新人が現場で足を引っ張らずに仕事してくれるか否かが、彼らの興味のすべてだからだ。

新卒面接とはなんだろう、と早紀は時々自問する。自分たちは学生の手足を好き勝手な方向から引っ張って、何をしようとしているのだろう。等身大の自分を語ってくださいと言いながら、聞きたいことしか聞こうとせずに、都合のいいことを喋らせようと躍起になっている。

和之は、技術系の話は無難にこなしたので、寺田には評価が高かった。逆に二次面接では評価の良かった天峰章吾は、寺田とは話が合わないようだ。

二人とも東征大学生。志望する職種も同じで、配属されれば寺田の擁する開発部隊にあたる。このタームの選考内定は全体で七名を予定しており、そのうち寺田の担当する部署には一名の割り当てだ。特別な事情がなければ、章吾か和之かのどちらか一方を採る選択になる。

早紀としては章吾を推したい。だがブログの存在を知らない寺田にとっては、和之の方が食指の動く人材らしい。
「サークル活動の話などあったら聞かせてもらえますか」
早紀が聞くと、章吾は逡巡するように間を空けた。
章吾のブログのチェックも、既に済んでいた。更新自体は一年前で止まっていたが、いい記事があったのだ。彼は二本橋卓也と同じボランティアサークルに所属しており、ブログには二本橋のものと違って、誠実な人柄を思わせる記事が並んでいた。章吾は控えめに答えた。
「ボランティアサークルに入って、老人ホームの慰問などの活動をしていました」
そうした活動をしていれば、普通面接では自分からアピールするものだ。二本橋の場合はあれだったが、アピールすること自体は必要なことなのだが……。
「面接で喋るためだけにボランティアサークルに入ってるような人も、中にはいますから。そんな風に思われたくないので、あまり語りたくなかったんです」
二本橋卓也の記憶があるからだろう、寺田も前園も納得顔で頷いた。プラス印象になるはずだ。早紀も、和之の表裏の激しさを見ていただけに、心が洗われる思いだった。
「今後の採用活動の参考にしたいのですが」

一区切りついたところで、早紀は切り出した。
「今までに受けた会社の選考で、印象に残っているものがあれば教えて頂けませんか」
和之も章吾も、すっと身構えるのがわかった。自然な反応だ。学生は他社に関する話題を喋りたがらない。
「選考はこれが初めてです」和之が答えた。
やはり正直に答えてはくれないか。ブログでは、和之は最低でも二社は選考を受けて落ちているのだが。だが問い詰めるわけにもいかない。
章吾は、ある会社の面接で、面接官がよく話を聞いてくれたのが印象に残っているという話を語った。ありがちだが、語りにくい話題を即興で組み立てたらこんなものだろう。
「これも差し支えなければで結構ですが」早紀は食い下がった。「いま他に選考が進んでいる会社があれば、良ければ名前を教えていただけますか」
「御社だけです」章吾が答えた。当然の受け答えだ。
和之もそう答えるかと思ったが、ぽろっと零れるように口にした。
「株式会社ティルネットが、本日選考予定です」
面接を終了し、前園たちとの合否判定の話し合いで、早紀は強く章吾を推した。

寺田も前園もどちらを通すかは迷っていたようで、早紀の強い推薦に、ではそうしようという流れになった。

＊

ブログの更新はその日の夕方にあった。

【七星システムズ三次面接終了。午後は株式会社テ〇ルネッ〇。ここの人事も殺す。】

フロアの人間が出払ったタイミングを見計らって、早紀は調べておいた株式会社ティルネットの連絡先をダイヤルした。相手はまだ帰社していなかった。

〈そんな子には見えなかったのですが〉

ティルネットの新卒担当人事は杉崎と名乗った。早紀より一回り年齢が上の、落ち着いた声の女性だった。

簡単に事情説明を終えると、彼女は困惑した調子で答えた。

〈久遠坂和之さんですよね。今日面接をしたばかりなので記憶しています。前に出るタイプではなさそうでしたが、芯のしっかりした学生という印象でした。信じられないです〉

面接選考の限界を感じた。やはり面接のやりとりで相手の人間性を汲み取ることなど、できやしないのだ。

早紀はブログのアドレスを教えた。ちょっと待ってください、としばらくパソコンを操作するだけの間があった。

「残念ですね……」と吐息をつく声が聞こえた。それから、嫌な時代ですね、とぽつりと呟いた。

それは適切な表現かもしれないと、ふと思った。嫌な学生でも嫌な会社でもなく、嫌な時代。

〈こんなタイプの学生が増えてきていると、漠然と思ってはいたんです。でも実際に裏側を見せられると、嫌なものですね……〉

「ごめんなさい」

〈いえ、ありがとうございます。私も自分の身は大事ですから。対処については検討したいと思います。それから、他に予告されている二社について心当たりがあるので、私の方から連絡してみます。去年弊社で参加した合同説明会の参加企業の中に、そんな名前の会社がありましたので〉

複数の企業が協賛して就活生獲得のために催す合同説明会は、就職活動の入り口だ。おそらく和之はそのときの合同説明会に足を運び、参加企業の中から、エントリーする企業を選んだのだろう。

〈悪ノリが過ぎているだけのような感はありますが、万が一ということもありますし、十分注意するよう促しておきます〉
「ありがとうございます」
〈……私、ときどき思うんですよ。最初に見捨てたのはどっちなんだろうって〉
早紀は問い返す。「見捨てた？」
〈私の若い頃は――〉
言いかけ、こういう言い回しを使うようになると歳を感じるわね、と杉崎は笑った。
〈私の若い頃は、世の中は自分を必要としているんだって、疑ったことなんてありませんでした。人生の主役は自分だって確信があった。もちろん日々の生活の中で現実を思い知ることはあります。でもその確信が最初にあったから、立ち止まらずにいられたと思うんです。けれど近頃の若い子は、世の中が自分を欲しているわけではないことを、最初からわかっているんですよね〉
杉崎が深い吐息をつくのが聞こえた。早紀には面接室で杉崎の前に座る、折り目の正しいスーツに身を包み、物分り良く振舞う顔のないシルエットたちの姿が見える気がした。
〈面接をしていて、若者たちはもう世の中を見捨ててしまったんだなあ、と思うことがあります。社会に、大人に、何も期待をしていない。社会が若者を見捨てたのか、若者が社会を見捨てたのか。どちらが先なのかはわかりません。でもいつの間にかすっかり距離が空いてしまった。そんな感じがします〉
早紀は口を挟まなかった。杉崎もまた、早紀に返事を期待しているわけではないとわかったからだ。人は日常の端に淀んだ自分の言葉を、声を発しない誰かにただ聞いてほしいときがある。それはネットの書き込みに似ていた。
杉崎がふっと小さく吐息をつくのが聞こえた。それで彼女の下に現実が戻るのがわかった。
〈久遠坂さんの対処については、できるだけ穏便に行いたいと思います。ただ万一、通報ということもあり得ます。その際、七星さん側のご都合などありましたら伺いたいのですが、いかがでしょうか〉
通報をすれば、七星グループがネット検閲をしていることが露見する可能性があるが問題はないか、ということだ。
「そうですね。この件についてはあくまで私個人がお知らせしていることを、了解して頂ければ幸いです。私が、個人的にネットを利用していて発見し、お知らせしている。会社は関知していない。――そうとって頂ければ」
しばらく、電話の向こうで黙考する気配があった。

〈当人が喋る可能性についてはどうお考えですか〉
「当人？」
〈我々が喋らなくても、通報すれば、久遠坂が、その――逆ギレ、を起こす可能性があります〉
言っている意味が呑み込めなかった。和之自身は、早紀がネット越しに和之のブログを見ていることを知らない。通報者が喋らなければ、和之がそれを知ることはないはずだ。
杉崎が、あ、と得心のいったような声を発した。〈ひょっとして、更新していませんか？　七分前の投稿です〉
早紀は携帯を握り締めたまま、机の上に広げたノートパソコンの画面を見やった。
最新記事は、【七星システムズ三次面接終了。午後は株式会社テ〇ルネッ〇。ここの人事も殺す。】
投稿時間は、二時間前だ。
早紀はおそるおそるキーボードに手を伸ばした。Ｆ５ボタンを押すと、画面が一瞬白く切り替わる。
更新された画面の一番上に、その文字列は見えた。

【見てるんだろ？　七星システムズの人事】

早紀は弾かれたようにモニタから身を離した。
ブログの記事がそれ自体に独自の意思を持ってモニタの向こうから手を伸ばしてくるのではないかという、馬鹿らしい錯覚が頭を過ぎった。

【他人の日記を平然と盗み見て選考を行うとはゲスなやり口だな。今まで受けた会社の中でも最悪の部類だね。何が学生の目線に立った選考だ。
ずっと前から気付いてたんだよ。どういう面接をしてくれちゃうのか、楽しみにしてたんだけどな。あんた誰？　眼鏡かけた白髪のオッサン？　細かいことに五月蝿いデブ親父？　それとも怖い顔してた美人のネーチャン？　多分ネーチャンだな。なんだよ、今日の質問は。】

一瞬の間に、色々な感覚が、早紀の胸の中に好き勝手に散らばった。それはかくれんぼでみつかったときの感覚に似ていた。
子供の頃、かくれんぼはある種の制裁の役目を果たしていた。クラスで乱暴な男の子がいると、

かくれんぼのときに鬼役にする。最初こそ獲物を捕まえるといった風情で走り回る鬼だが、誰もみつけられないまましばらくすると、自分が取り残され、隠れ場所から沢山の目に、見張られていることに気付くのだ。そうして鬼は人間を“捕まえる”から、“探し求める”ようになる。

日頃乱暴な男の子が涙をこらえて走り回り皆を求めるのを、子供たちは隠れたまま見やって日頃の溜飲を下げた。次の日から男の子は少し大人しくなっている。かくれんぼは鬼が隠れた人間を捕まえるゲームではなく、隠れた人間が人間を探し求める鬼を観察するゲームだった。隠れているということはそれだけで、人を優位にするのだから。

早紀はパソコンのネットワーク接続を確認した。接続するときの匿名性には気を遣ってきたし、和之のブログに繋ぐ際に、社内ネットから繋いだ記憶はない。追跡できるような跡は残していないはずだった。

【あんな答えにくい質問すんじゃねえよ。どんな質問してもいいと思ってんのかよ。こっちは人生かけてんの。てめえらみたいに無能でも入社できた時代じゃねえの。新卒で就職できないと人生詰むの。やり直しが効かないから必死なんだよ！　てめえらがそういう社会にしたんだろうが。上から目線で好き勝手言ってくれやがってよ。何か勘違いしてんじゃねえか。自分たちが何か偉いとでも思ってんのかよ。くだらない選考して悦に入ってるだけのくせに。おまえらの自己満足のために振り回される身になってみろよ！】

自分が何か偉いとでも思ってんのか――それは的を射ているのかもしれなかった。それはかくれんぼなのだ。若者と社会の。履歴書を掲げて走り回る鬼を、早紀たちは会社という壁の陰にひっそりと隠れたまま見定めている。

だから若者たちは、自分が隠れられる番になると、仕返しするのだ。

【殺人予告。】

自分の名前をネット上で見つけることほど嫌なことはなかった。

【株式会社七星システムズの人事、横上早紀を殺害する。】

＊

〈通報します〉
事情を告げると、ブログを見た雄大は、受話器の向こうから噛み付きそうな勢いでそう言った。
〈親会社がどうとか言っている状況じゃないですよ。僕が責任とります。通報します〉
「でも……」
〈早紀さん、今何処にいますか？〉
「まだ会社だけど」
〈周りに人は？〉
言われて、早紀はフロアに誰も残っていないことに気付いた。残業規制の実施で、全社的に帰宅時間が早くなっている。
「居室の人はみんな帰った。他の部屋は知らない。なんでそんなこと訊くの」
〈自宅に帰った方がいいと思います。もう少ししたらそっちの居室まで行きますから、一緒に帰りましょう〉
「久遠坂が本気で殺しにくるっていうの？」
〈いや、そうじゃない。奴も悪ノリしているだけだとは思う。でも気をつけた方がいい。けど焦らないで大丈夫〉
そう言う自分の方が焦っていることに気付いたのだろう、雄大は言葉を途切れさせた。深呼吸を一つする音が聞こえた。〈すみません。落ち着きます〉
柄にもなく焦っている雄大の様子に、逆に頭が冷えてきた。いつもの調子を取り戻したくて、つい、そこまで心配してくれなくても大丈夫だよ、と軽く応じた。不本意そうな沈黙が返った。
憮然とした声で、〈そりゃ心配もしますよ。こんなこと書かれて〉
「……ごめん」
〈いいんです。僕が心配性なだけなのかもしれない。騒ぐようなことじゃないのかもしれないし、それで早紀さんに迷惑をかけたくはないです。……でも、心配なんです〉
今度は素直に、その言葉を言えた。「ありがとう」
〈やっぱり一一〇番しちゃうと、いろいろ大事になっちゃうかもしれませんね。大学の同期に警察に入った奴がいるので、なんとかできないか、相談してみます。警察にお灸据えてもらえば、ネット弁慶の小心者なんか、すぐに黙りますよ。早紀さんはそれまで気をつけて。一人にならないようにして〉
早紀を安心させるのが自分の職務だというように、付け加えた。〈大丈夫ですから〉

ネットの殺人予告なんかより、その一言の方が強かった。
恐怖心は薄らいでいた。ありがとう、ともう一度言って、早紀は電話を切った。
パソコンを見やると、モニタの上には、まだブログが表示されたままだ。しばらくその画面をみつめていた。
恐怖心は薄らいで、代わりに怒りを連れてきた。
――舐めてるんだ。
久遠坂和之の顔を思い浮かべた。あの一見優しげな風貌で、表ではそつなくこなしながら、裏では醜悪な顔を堂々と晒して隠そうともしない。
舐めてる。でも悔しいのは和之のことだけではない。世の中、こんな奴らばかりなことだ。自分が何か偉いとでも思っているのかと、和之は早紀に書いた。自分が何か偉いとでも思っているのかと、早紀は和之に思う。皆が皆そう思ってふんぞり返ったまま、誰とも話をしていない。こんな顔ばかり、見たくない。
早紀はメール作成画面を開くと、和之のアドレスを打ち込んだ。面接結果のメールは、合格用と不合格用で、定型文の名前部分だけ置き換えて送信することになっている。不合格用の文章をコピーし、本文に貼り付けて編集した。

【久遠坂和之　様。今回は弊社の入社面接をお受け頂き、まことにありがとうございました。慎重に討議を重ねました結果、今回は、久遠坂　様のご希望に添えかねる結果となりましたことをお知らせ致します。】
追伸、と続け、キーを打ち込む。
和之のブログアドレスをコピーした。
【久遠坂様のブログを拝見致しました。近年、ＷＥＢ上での殺人予告から、逮捕に繋がる事例が増えております。例えほんの悪戯心のつもりであっても、世間的には問題となる行為でありますことをご理解ください。今後、改善が見られない場合は、相応の手段に出させていただきますことをお知らせ致します。】
不合格を知らせるメールには、最後に学生の今後の活躍を祈る文を付けるのが慣習だ。
【今後の　久遠坂　様の益々のご活躍をお祈りしております。】
少し躊躇したが、叩くようにマウスをクリックした。ダイアログが表示され、瞬く間に送信が完了する。
やってしまった、と大人気ない挑発行為に一瞬だけ後悔がよぎったが、振り払った。言ってやらねば、気付くまい。

もう、ブログで何を書かれようが構わない。見たくもなかった。これ以上関わるつもりもない。
ブラウザを閉じようと手を伸ばした。
と、デスクががたがたと鳴りはじめた。
早紀はマウスに手を伸ばしたまま、机の上で震えるＰＨＳをみつめた。液晶画面に「外線」と文字が表示され、番号が表示されている。会社支給のＰＨＳ番号は、問い合わせ対応用として受験者に公開している。
いやな予感がした。
デスクの上に、履歴書を閉じたファイルが置いてある。一番上から和之の履歴書を取り出し、携帯番号の欄を確認した。それからもう一度、ＰＨＳの液晶に目をやった。
久遠坂和之の番号だ。
鳴るままに放置しておくと、やがて止まった。
しばらく、液晶をみつめたままＰＨＳを握り締めていた。――ネットから電話へ、距離を詰めてきた。
と、パソコンのスピーカが、ピコン、と電子音を発した。
見ると、モニタにポップアップが上がっている。新着メールだ。

差出人は【久遠坂和之】。
件名は【Re：選考結果】。
ひたひたと何かが歩み寄る足音を聞いた気がした。
見つめていると、数分もしないうちに、またポップアップが上がった。
【久遠坂和之】
【Re:選考結果2】
またＰＨＳが震えはじめた。和之の番号だ。
自分で自分の身体を抱くと、鳥肌が立っているのがわかった。糸に引かれるように、ＰＨＳに手を伸ばす。着信ボタンにかけた指を押し込む勇気が湧かない。
どうにでもなれ。思い切って押しこんだ。バイブが止んだが、切れたのか通話が繋がったのかわからなかった。
おそるおそる耳に当てると、焦ったような和之の声が飛び込んだ。
〈――違うんです！〉

「こんばんは」
早紀が帰る支度をしていると、ドアが開いて顔が覗いた。
振り返ると、面接のときのままのスーツ姿が立っていた。
「面接結果、今日中に連絡するって言ってたのに、まだ連絡がないから、気になって来てしまいました」
あはは、と照れたように頭をかくと、天峰章吾は並んだ無人のデスクを見渡した。「おひとりですか？」
「ええ。もうみんな帰りました」
「そうですか」
「どうやって入ってきたの？　下に守衛はいなかった？」
「いましたよ。通してもらったんです。就活でここを受けている学生だって言ったら、通ってもいいと言われました」
守衛は部外者を一人で敷地内に入れるような真似をしない。基本は来客用スペースに通すし、フロアに入れる場合も、必ず訪問者に確認の電話を入れる。電話はきていない。

「結果をどうしても知りたかったんです」
早紀の不審に気付くでもなく、章吾は続けた。
「電話でとも思ったんですけど、やっぱり直接の方が熱意も伝わるだろうと思って。ここを落ちたらもう後がないんです。この時期に説明会からやり直しになると、売れ残りしか選択肢がなくて、そういうところはブラックで、人を使い捨ての駒としか見てない。勝ち組から搾取されるだけの負け組コースで、金もなく結婚も出来ずに、奴隷として働くだけで人生終了。人生ってこの歳で決まるんですよね。だから僕、一生懸命やってるんです。面接結果、どうですか。僕、頑張りますから。頑張って働きますから」
気圧され、一歩下がった。
そのとき、またＰＨＳが鳴り始めた。液晶に映った番号は、ティルネットのものだ。
〈杉崎です。向こうからリスト頂きました。今から転送しますが、早紀さんの言ったとおりでした。ブログ上で殺人予告された、株式会社ソルテットさんと陸頼商事さんなのですが、やはり受験者リストに久遠坂和之の名前はありませんでした。両社を共に受験し、受験日がブログに記された日付に一致する学生は、該当一名、天峰章吾という学生です〉
受話器を耳に当てた早紀に背を向け、章吾は、早紀のＰＣのモニタを見ていた。

モニタには、和之からのメールが開かれ、表示されたままだ。
【久遠坂和之です。いま選考結果のメールを読んだのですが、追伸以下に書かれている内容がなんのことかわからなかったので、問い合わせたく連絡しました。ここにあるブログを、僕が書いたものだと思っておいでですか？　だとしたら誤解です。自分はこんなブログ書いてません。ざっと見ただけですが、ここに書かれている会社のうち、ティルネットさん以外は受けてもいないです。】
章吾は自分の身体で早紀の視線からモニタを隠すようにしながら、メールを読んでいる。
【選考結果については残念ですが、仕方ないと思って納得しています。就活出遅れて対策もできていなかったから、上手く話せなかったと自分でも思ってます。でも落とされる原因が、僕自身ではなくてこのブログなのだったら、納得いかないです。なんのために面接で話をしたのかわからないです。】
章吾が、手をかけたマウスをそっと動かした。モニタの上で、カーソルが、削除ボタンに吸い寄せられる。
ばかじゃねえの――章吾の唇がそっと動いた。その表情は、毎日の電車の中で、社内で、街角で、ふと見かける気だるげな表情に似ていた。

早紀は電話を切った。その音はいやに大きく響いて、つられるように振り返った章吾と目が合った。
「見ました？　今の」
早紀の返事を待たずに、章吾は続けた。
「会社が自分を見ていると思ってるんですよね。世の中が自分を中心にして動いていると思ってる。そんなわけないっしょ」
世の中を信頼する奴なんて馬鹿を見て当然だ――そう言っている。
早紀は首を振った。「私達は学生を見ています」
章吾は笑みを浮かべたまま頷いた。「そうですね」
欠片も同意していないことだけは伝わった。
「面接結果、どうなんですか。久遠坂くんが落選なら、僕は採用なんじゃないんですか？」
「久遠坂さんの結果はまだ未確定です。選考において過誤があったことがわかったので、審議をやり直す必要があります」
「ブログ云々に関わらず、久遠坂くんは面接の出来が良くなかったので落とす、でよくないですか？　撤回して合格にしますか？　ブログを検閲して合否判断にしていたなんて認めたら、久遠

坂くん怒ると思います。あちこちで吹聴するかもしれないし、そしたら会社としても困りますよね。あくまで面接の出来で落とした。それで通した方がいいと思うんですが」
「だめです」
章吾は苛立ったように頭を掻き毟った。「あなたの一存でそんな決定をしていいの？」
「責任はとります」
「七星グループの人事姿勢の実情が、ネットに広まることになっちゃう」
「実情は実情として謝罪をせねばならないと思っています」
「ここからは、ほんの世間話と思って聞いてほしいんですけど」
章吾は鼻で息をつくと、突然、デスクの上のキーボードやマウスをばん、と散らした。
デスクの上に尻を乗せると、胸を反らせて早紀を見下ろす。爽やかさを残した仮面を外し、片唇を吊り上げてにやと笑った。
「もし今あなたの身に何かあったら、疑われるのって誰だと思いますか？」
「……これは脅迫ですか？」
「ただの世間話だよ。“久遠坂和之”がブログにあなたの殺人予告を書いていることは、他にも知っている人がいるでしょう？　例えば、あなたが久遠坂くんに選考落選メールを送った直後に殺されたとしたら、その人たちはどう思うか。久遠坂くんが殺人予告を実行に移した――そう思うでしょうね」
「ブログの本当の著者を警察が調べますよ」
「無理。海外のフリーサーバを通しているので辿れない。よしんば証拠不十分で久遠坂くんのものと断定されないにしても、世の中、疑わしきは真っ黒、でしょ？　マスコミは殺人予告を取り上げるし、久遠坂くんの名前は即ネットに拡散する。検索で一瞬にして過去がわかる時代ですから。悪い噂と一緒に名前がネットに転がっていれば、彼の人生に弊害が生じることくらい、あなたならわかるはずだよね？　早紀さんが変な意地を通すと、久遠坂くんまで不幸になるよ」
章吾はデスクからとん、と降りると、一歩、早紀の方へと踏み出した。
「頑なに考えなくてもいいんじゃない？　こういうことやってるの、あなただけじゃない。みんな恋人や友達の名前を検索してる。裏でどんなこと言ってるのかって調べてる。だって表で口にされる言葉より、裏で囁かれてる言葉の方が本音な気がするでしょ？　面と向かって好きだって言われても社交辞令かもしれないけど、自分の見てないところで好きだって言われてれば本当だと思うでしょ？　現実に嘘しかないから、みんな本当を探してるわけ。だから探し場所に嘘を置いておいて読ませれば、簡単に信じさせられる。僕はそれに気付いて利用してるだけ」

ゆっくりと近づいてくる章吾を、早紀は手を振って遮った。
丁寧に深々と頭を下げた。
「今後の天峰様の益々のご活躍をお祈りしております」
がん、と脇のデスクの位置がずれた。章吾が蹴りつけたのだ。
顔を上げると、章吾がじっと早紀を睨んでいた。「ふざけんなって」
早紀は視線を受け止めた。「天峰様は不合格です」
「おい、こら――」
「天峰様は当社の必要としている人材ではありません」
「ちょっと――」
「天峰様のような性根の卑しい人間はお断りでございます」
「あのな、おまえ……」
「ぶっちゃけうざい」
ぴたりと動きを止める章吾。
「おまえみたいの見飽きた。どっか行け。社会に出てくんな」
章吾の顔色がみるみる赤黒く染まり、ぱくぱくと口を開け閉めした。口の中で言葉にならない言葉を呟き、何かを叫ぶ。言葉としては聞き取れなかった。
早紀の方に歩み寄ってくる。後退する早紀の方に腕を伸ばし、椅子を乱暴に手で散らしながら迫る。
「っっざっけんなっ――」
早紀の肩に手をかける直前、ばん、と部屋の入り口のドアが開け放たれた。
二人組みの大柄な男が、部屋に入ってくる。立ち尽くす章吾のもとまで悠然と歩み寄ると、さっと身体を抑えた。
章吾は目を白黒させた。二言三言だけ何か喚いたが、男が一喝すると、すぐに大人しくなった。
「大丈夫ですか？」
声に振り向くと、雄大が心配げな様子で立っていた。
力が抜けて椅子にへたりこむ。「……怖かった」
「無事で何よりです。連絡を受けたときは何事かと思いましたけどね」言ってから、ぽつりと付け加えた。「最後、早紀さんも十分怖かったです」
和之からの電話を受けたあと、早紀は杉崎に連絡をとった。ブログに記述された会社に、和之の受験記録があるか確認を頼むためだ。結果は否。ブログに記述された会社も人事の人間も、実

在はしたが、久遠坂和之という学生が受験したという記録はなかった。
ブログの記述は、和之のものではない。挑発的な文句を並べ立てるブログは、別の誰かが和之に悪印象を付けるための大道具なのだ。早紀は更新されていくブログをじっと見据えたまま、誰の仕業かを考えていた。犯人は、和之が、ティルネットを受験したことは知っていた。
早紀を迎えに居室にやってきた雄大は、廊下から部屋の中の早紀を覗き込んでいる男の姿を発見した。不審な様子に、雄大が見ていると、男子トイレに引っ込んだ。一番奥の個室が閉まり、携帯を操作する音が聞こえてきた。
守衛室から、学生に配った来客用ＩＤカードが一枚返却されていないと連絡が入り、早紀と雄大は顔を見合わせた。
天峰章吾のものだった。

椅子にへたりこんだまま、気配を感じて振り返ると、フロアの隅に立っている姿に見覚えがあった。
久遠坂和之だ。事情を知って駆けつけたらしい。目の前の状況を呑み込みきれないような複雑な表情をしている。自分の選考の裏で何が行われていたかを知って、彼もまた、社会を見捨ててしまうのだろうか。
和之の脇を通るとき、章吾が恨めしそうな一瞥をくれた。和之は苦笑いしながら、軽く手を挙げて応えた。ばあか、何やってんだよと。陥れられそうになった者としてはあまりに軽いポーズで。それを見た章吾の表情が、つられて一瞬だけ、苦笑めいたものを浮かべる。
ふと、思った。彼らは同じ時代、同じ年代にある者でないとわからない何かを共有しているのだと。
振り返り、早紀と目が合うと、和之は笑みを浮かべた。
どこか寂しそうな笑みだと思った。

8

「申し訳ありませんでした！」
やりなおし面接は、謝罪から始まった。関係者全員――早紀、前園、寺田に、何故か雄大まで巻き込み、全員で深々と頭を下げた。
本社の指示は、今回の件について学生に謝罪をしてはならないというものだった。曰く、ブロ

グの記述は公開されたものであるため、選考材料にすることに一切の問題はなく、その当人確認について百パーセントの確証を得ることは事実上不可能であるため、会社にそこまでの義務はなく、近年のウェブ上における炎上による風評被害の危険性を鑑みると――

（ぶっちゃけうざい）

前園は届いたＦＡＸを破り捨てた。

（ミスを認めて謝罪もできない人間が人事なんて務めてたら、会社は傾きます。本社の連中のことなんか聞いちゃいけません）

前園の判断は正しいと早紀は思った。企業が不祥事からネット上で炎上するケースは、ほとんどが隠蔽に走ったときだ。揉み消そうとするほど、ネットの住人は燃えてしまって、叩きに走る傾向がある。

寺田は、きっぱりと言う前園を見て、あれはあとで後悔する顔だぜ――と笑ったが、反対はしなかった。（頭下げるとか久しぶりだなあ）

和之は皆から頭を下げられ、目を白黒させた。

狼狽した様子で、いいんですよ、全然気にしてません――と言いかけ、いや、と思い直した様子で付け足した。

「ほんとは、ちょっといらっとしてたんです。でも、こんな風に謝ってもらえるなんて思ってなかったから、ほんと、全然気にならないです。むしろ志望度上がりました。だって、大人になったら、謝るのが簡単にできることじゃなくなることくらい、僕だってわかりますから」

ちょっと失礼な言い方ですかね、と恐縮する和之は、面接のときよりもずっと大人びているように映った。

「天峰の野郎は、どうしたんだ？」

「ま、大目玉くらいで済んだようですよ」

寺田の問いに、雄大が答えた。

「実質的な被害はなかったし、早紀さんにあんな挑発されたら、まあカッとくるのも仕方ないってことらしいです。脅迫罪で引くかどうか訊かれたけど、大事にしないでくれって言っておきました。話を聞いてると、天峰も、根っから悪い奴ではないんですよね」

「あいつが？」

「ほら、二本橋卓也が入っていたボランティアサークルあったでしょう？　天峰、あのサークルの開設者なんですよ。自ら開設するくらいだから、他のメンバーに比べ、活動もずっと精力的にやっていた。二本橋と違って、天峰は純粋な動機でサークル活動をやっていたわけですね。とこ

ろが、どうも面接の方が苦手だった。就活は上手くいかずに全滅の様相。対して、サークルを適当に利用していた二本橋の方は、内定を沢山持っていた」

就活ノイローゼ気味になった章吾は、二本橋のブログを見ながら嘆いたそうだ。何故こんな奴が内定をとれて自分はとれないのか。

そして思う。結局、社会は人間の表面しか見ようとしないものなのだと。

（面接で喋るためだけにボランティアサークルに入ってるような人も、中にはいますから。そんな風に思われたくないので、あまり語りたくなかったんです）

面接のときに章吾が語った言葉を、早紀は思い出した。あれは章吾の本心だったのだろう。

「天峰は、サークルのウェブサイトも管理していた。アクセス解析で『二本橋卓也』の名前検索で、うちの会社からサイトへ接続があったことを知ったんです。その直後に二本橋が落ちる。それで天峰は、うちの会社が、新入社員選考にネットを使っていると確信した。これは使えると思い、表の面接より、裏の面接に集中することにした」

表面しか見ようとしない社会に、本心を見せる必要はない。適当に顔を使い分けて、嘘を信じ込ませても良心は痛まない。

章吾もまた、そういう結論に達していったのだ。多くの若者たちのように。

「久遠坂くんの偽ブログを作ったのは、ライバル減らしのためだったそうです。同じ大学で同じ職種を同じタームに受ける受験者なので、枠を計算したんでしょうね。よく考えてみれば、そう易々とブログを特定できたのがおかしいんですよ。個人が特定できるのは二割程度だってことなのに。天峰が、特定できるように作ってたってわけです」

「それにしても」寺田が首を捻った。「どうしてアクセス解析にうちからの通信記録が残ったんだ？　早紀ちゃんはちゃんと予防してたんだろ？」

「ああ、それは、僕が一度、飲み屋から社内ネット経由で接続したときの足跡をとられたらしい。早紀さんが飲み屋で二本橋のことを愚痴っていたときですね。あはは」

「あははじゃねえ。おまえのせいか。ていうかおまえ、情報資産を無断で社外に持ち出したのか」

隅に呼びつけられ、寺田にこってりとしぼられる雄大は放っておいて、面接を始めることにした。早紀はノートパソコンの蓋を閉じ、和之の目を見た。結局、前回の面接で、早紀は何一つ和之のことを見ていなかったのだから。今度こそ、人を見たいと思った。

和之は、以前よりずっと自然体の様子で受け答えした。

いや、和之は変わっていないのかもしれない。ネットで、テレビで、人の裏の姿ばかりを覗き見ていたから、早紀が自分で彼らのいいところを見れなくなっていただけなのかもしれない。

休憩時間に、前園がふっと呟いた。
（我々は人の表面を見ていてはいけない。けれど裏を覗くのではない。人の奥にあるものを見通さないといけないのでしょうね）

「それでは最後に、志望動機を教えてください」
「御社は七星グループの一員として、システム業界の――」
和之は言いかけ、ふ、と笑って止めた。
悪戯っぽい顔をして、こう言った。
「横上早紀さんがいるからです」
椅子から転げ落ちる音が響いた。見ると、雄大が床に転がって口を引き攣らせている。
寺田と前園は顔を見合わせ、笑いを抑えるのに苦労している様子だ。
早紀は吐息をついた。雄大が立ち上がり、落ちちまえーと叫ぶ声が響く。窓の向こうは桜が色づいている。
春は新入社員の季節である。